―私たちが知らないカビの素顔―

カビのはなし

―ミクロな隣人のサイエンス―

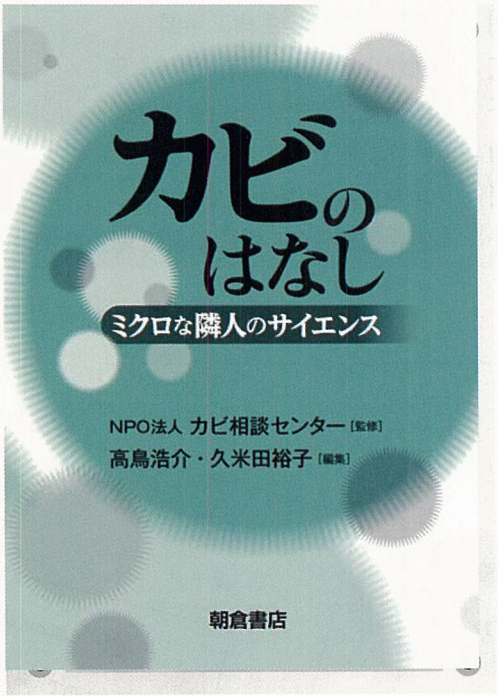
第一人者が初めて書き下ろした
「カビと生活を科学する」本

NPO法人
カビ相談センター＝監修

NPO法人
カビ相談センター理事長
高鳥浩介

大阪府立公衆衛生研究所
久米田裕子【編】

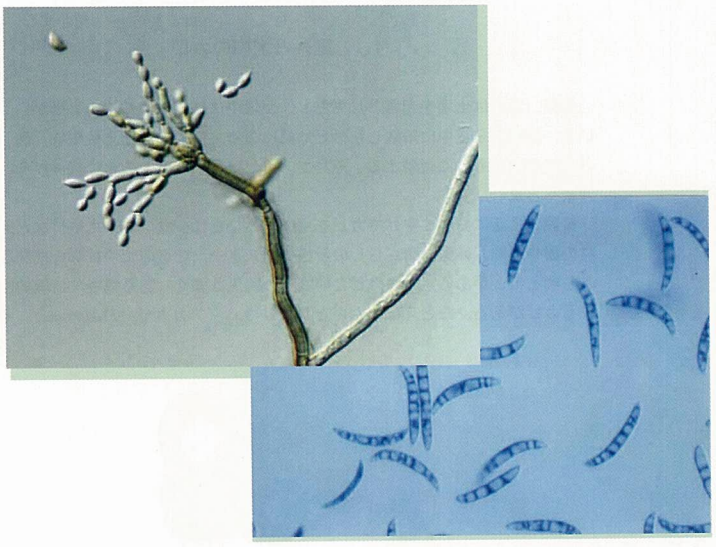
A5判　164頁
定価（本体2800円＋税）
ISBN 978-4-254-64042-7



●私たちが意外に知らない「カビ」の真実の姿―。その正しい理解を通じて環境被害・健康被害に正しく対処し，ひいては利用や共生まで展望したはじめての本格的な教養書。

●関連業界の技術者や大学の研究者・行政機関の担当者はもとより，広く一般読者にカビに関する基礎知識を提供する一冊。

【内容目次】
第１章　生活環境にみるカビ
第２章　カビとは何か
第３章　食のカビ
第４章　住のカビ
第５章　衣のカビ
第６章　カビによる被害
第７章　カビを防ぐ
第８章　有用なカビ
第９章　カビとの共生



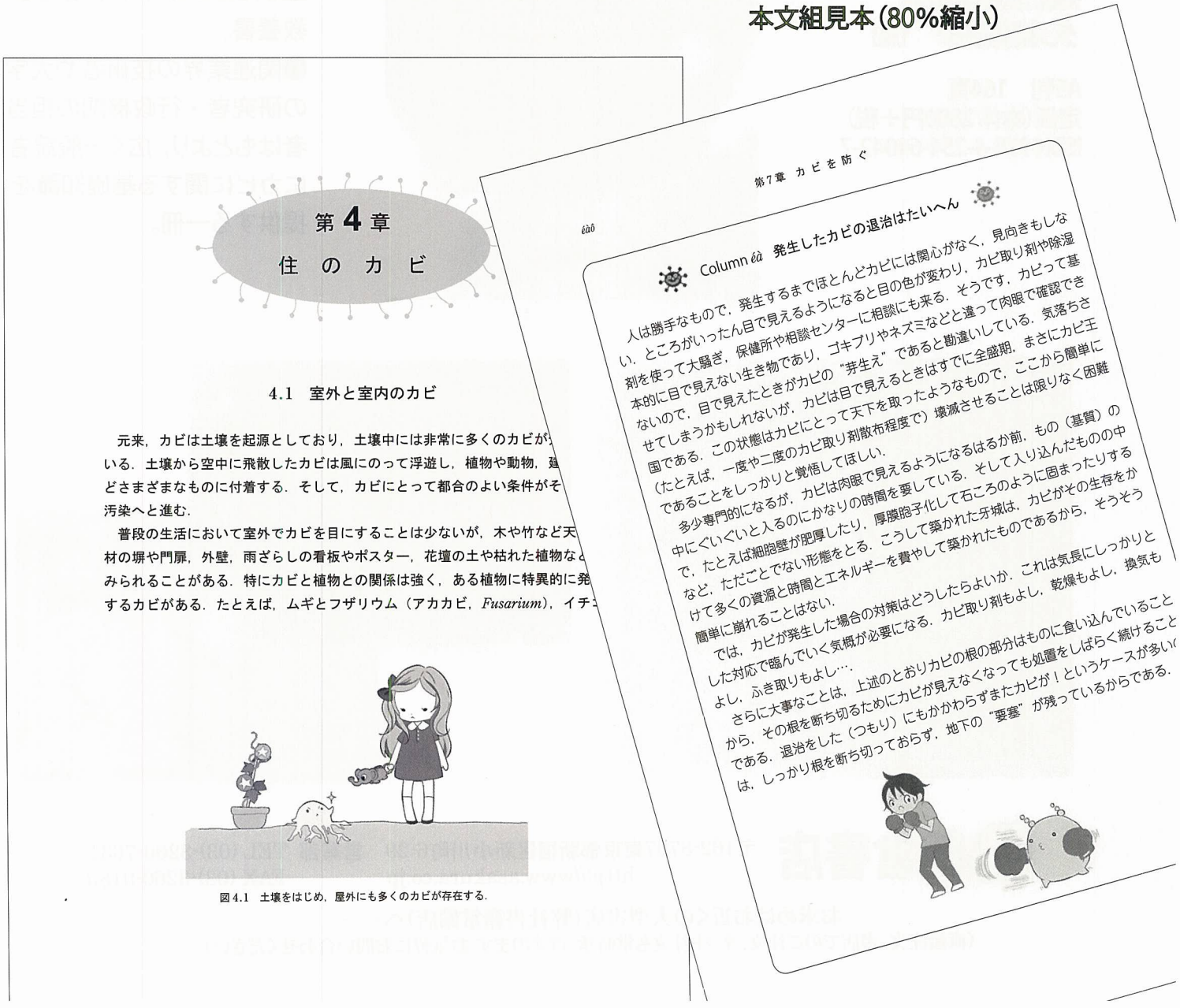
朝倉書店　〒162-8707東京都新宿区新小川町6-29　営業部 TEL (03)-3260-7631
http://www.asakura.co.jp　FAX (03)-3260-0180

お求めはお近くの大型書店（弊社書籍常備店）へ――
（直接注文，書店でのご注文，ネット注文も常時承っております お気軽にお問い合わせください）

執筆者（五十音順）

秋山　一男	国立病院機構 相模原病院
大久保陽一郎	東邦大学医学部 病院病理学講座
太田　利子	相模女子大学 栄養科学部
久米田裕子	大阪府立公衆衛生研究所 感染症部
小西　良子	麻布大学 生命・環境科学部
坂本　　仁	関西大学 化学生命工学部
渋谷　和俊	東邦大学医学部 病院病理学講座
高鳥　浩介	NPO法人 カビ相談センター
高橋　淳子	桐生大学短期大学部 生活科学科
田中　真紀	NPO法人 カビ相談センター
土戸　哲明	関西大学 化学生命工学部
椿　　和文	株式会社ADEKA 研究開発本部
村松芳多子	新潟県立大学 人間生活科学部
森永　　力	県立広島大学 生命環境学部
森永　康司	TOTO株式会社 総合研究所
渡辺麻衣子	国立医薬品食品衛生研究所 衛生微生物部

本文組見本（80%縮小）



第 4 章
住の カビ

4.1　室外と室内のカビ

元来，カビは土壌を起源としており，土壌中には非常に多くのカビが
いる．土壌から空中に飛散したカビは風にのって浮遊し，植物や動物，
どさまざまなものに付着する．そして，カビにとって都合のよい条件が
汚染へと進む．

普段の生活において室外でカビを目にすることは少ないが，木や竹など
材の塀や門扉，外壁，雨ざらしの看板やポスター，花壇の土や枯れた植物
みられることがある．特にカビと植物との関係は強く，ある植物に特異的
するカビがある．たとえば，ムギとフザリウム（アカカビ，*Fusarium*），

図 4.1　土壌をはじめ，屋外にも多くのカビが存在する．

第7章　カビを防ぐ

Column éâ　発生したカビの退治はたいへん

人は勝手なもので，発生するまでほとんどカビには関心がなく，見向きもしな
い．ところがいったん目で見えるようになると目の色が変わり，カビ取り剤や除湿
剤を使って大騒ぎ，保健所や相談センターに相談にも来る．そうです，カビって基
本的に目で見えない生き物であり，ゴキブリやネズミなどと違って肉眼で確認でき
ないので，目で見えたときがカビの“芽生え”であると勘違いしている．気落ちさ
せてしまうかもしれないが，カビは目で見えるときはすでに全盛期，まさにカビ王
国である．この状態はカビにとって天下を取ったようなもので，ここから簡単に
（たとえば，一度や二度のカビ取り剤散布程度で）壊滅させることは限りなく困難
であることをしっかりと覚悟してほしい．

多少専門的になるが，カビは肉眼で見えるようになるはるか前，もの（基質）の
中にぐいぐいと入るのにかなりの時間を要している．そして入り込んだものの中
で，たとえば細胞壁が肥厚したり，厚膜胞子化して石ころのように固まったりする
など，ただごとでない形態をとる．こうして築かれた牙城は，カビがその生存をか
けて多くの資源と時間とエネルギーを費やして築かれたものであるから，そうそう
簡単に崩れることはない．

では，カビが発生した場合の対策はどうしたらよいか．これは気長にしっかりと
した対応で臨んでいく気概が必要になる．カビ取り剤もよし，乾燥もよし，換気も
よし，ふき取りもよし…．

さらに大事なことは，上述のとおりカビの根の部分はものに食い込んでいること
から，その根を断ち切るためにカビが見えなくなっても処置をしばらく続けること
である．退治をした（つもり）にもかかわらずまたカビが！というケースが多い
は，しっかり根を断ち切っておらず，地下の“要塞”が残っているからである．